

An aerial photograph of an archaeological site, likely a burial mound or a similar structure. The ground is dark brown and textured. Numerous white circles of varying sizes are drawn over the site, marking specific features or points of interest. The circles are most densely clustered in the central and lower-right areas. The overall shape of the site is roughly rectangular with irregular edges.

中 道 遺 跡

— 第3次発掘調査概報 —

1997  
11月

長岡市教育委員会

### 第3次発掘調査



遺構確認作業



住居跡土層断面の実測



礫捨ての様子



中道遺跡から東の下道古銭出土地・栖吉城跡を望む

中道遺跡は、信濃川右岸の東山丘陵から西に向かって流れ出る栖吉川の扇状地に位置する。栖吉川沿岸にはいずれも15世紀代の松葉遺跡、三貫梨墳墓、三貫梨館跡、14世紀半ばの下道古銭出土遺跡など中世遺跡が多数位置している。また、集落の背後には15世紀末から16世紀初めに、古志長尾氏が藏王堂城跡から拠点を移した栖吉城跡が存在する。縄文時代の遺跡には、前期の土器を出土した三貫梨遺跡、早期・中期の集落跡の松葉遺跡、晩期の大明神遺跡などがある。

中道遺跡の発掘調査は、圃場整備事業に伴って平成6年度から3カ年かけて行ってきた。第1次・第2次発掘調査では、縄文時代中期中ごろから後期・晩期の集落跡と、中世（15世紀代）の地下式横穴群などが発掘されている。

第3次発掘調査は、5月7日に幸町分室から現地の調査事務所へ調査機材等を搬入することから始める。それ以前に調査事務所の設置、包含層の上に厚く堆積している水田耕作土などの除去作業、基本杭の打設などの諸準備を行った。そして、5月15日から多数の発掘作業員を動員して、10月31日までの長期にわたる発掘調査に入った。

また、包含層には土器や石器などに混ざって拳大から人頭大の礫があった。石皿などの加工用、あるいは掘立柱の根固めに遺跡に搬入したものであろうか。いずれにしろ、直接的に遺物と見なされない礫が多数包含層から出土した。この

礫は残上の山や場外の穴に捨てた。その数はダンブで10台以上に上る。

なお、発掘調査の基本杭は、調査が数年にわたり、かつ各年次の調査が終了次第、水田の改良工事が行われるため、測量業者に委託して磁北に合わせて打設した。発掘調査が複数年にわたる場合や、調査面積が広がる場合には、非常に有効であった。

## 中道の縄文時代

第3次調査で発掘された縄文時代の主な遺構は、住居跡が19軒、掘立柱建物跡が2棟、フラスコ状ピットが9基などである。19軒の住居跡には、石組炉7基と埋燬炉2基が含まれている。また、10軒の住居跡は、いずれも晩期の住居跡で、1軒が単独で存在していたが、他の9軒は2～4軒の住居が重複していた。掘立柱建物跡は、多数の掘立柱穴から現場で2棟分だけを推定したものである。図上の検討でその数が増える可能性がある。



第61号住居跡群

## 晩期の住居跡（第2図）

第1次調査で検出された晩期の第22号住居跡から東へ約80mほどのところに、住居跡10軒がまとまって位置していた。そのうちの1軒は、床面に焼けた痕跡が見られた。

第61号・第62号・第71号住居跡 3軒の平面円形の住居跡が重なった状態で検出された。第61号住居跡は約10m、第62号は約12mの直径で、第71号は約11mと推定される。いずれも10mを超える大きさで、7m近い直径の第22号住居跡をはるかに上回っている。第71号の床面は、遺構の確認面と同じレベルで、第71号の床面より10～15cmほど低い第62号と、35cmほど低い第61号住居跡の覆土中に地山土を貼って床面としている。第62号住居跡も20cmほど低い第61号の覆土中に床を貼っている。貼床の状況から、第61号→第62号→第71号住居の順で改築が行われたと考えられる。なお、第2図で示した貼床の範囲は、調査で平面的に確認できた部分である。第62号の床面の一部に、黒くガチガチに堅くなった面が見られた。ガチガチの面は、確認できた第71号の貼床の全面にも広がっていた。すなわち、第61号のほぼ中央にある地床炉が確認されただけである。第61号住居跡群の覆土から晩期中葉の大洞C1式の土器が出土した。



第61号住居跡群土層断面



第61号住居跡群出土の玉



第61号住居跡群出土の土製耳飾り



第66号住居跡床面の炭化材



第66号住居跡床面の炭化材



第66号住居跡の焼けた柱?



第66号住居跡

**第66号住居跡** 遺構検出面である青灰色粘土の地山が、焼けて赤褐色や黒褐色に変色した面を床、その周囲にある溝を周溝と考えて、円形の住居跡とした。住居跡の時期は、床面から出土した土器から晩期中葉の大洞C1～2式期と考えられる。周溝は、地山面が傾斜していることなどから、一部でしか確認できなかった。住居跡の規模は、確認した周溝から直径が10mを超えるものと思われる。すなわち、1.5mを超える大型の円形の地床炉で、推定した住居跡のはほぼ中央に位置していた。床は灰や細かい炭化物が混じった『炭灰層』がかなりの部分を覆っていた(第2図の範囲)。床面には、板や細かい丸太などの炭化材があった。炭化材は住居の構造材の一部と思われるが、住居の上屋を復元するには至らないほどの断片である。なお、床面には大小の礫が点在し、中には焼けた床面を押し込んだり、炭化材の直上にあるものが見られた。石鏃や打製・磨製石斧などの生活の道具と、石棒や石冠などの祭祀用具が出土している。

**第63号・第69号・第70号・第71号住居跡** 青灰色粘土の地山面で、幾重にも巡る溝から、少なくとも4軒の円形住居跡が重複すると判断したものである。それぞれの周溝の直径は、第63号が約9m、第69号が約5.5m、第70号が約4m、第72号が約6mである。その中で第70号住居跡は最小の規模である。第69号の炉跡は、第63号の外側で、第69号住居跡の中央にある石組炉が確実である。また、第63号と第72号の周溝の

中ほどにある地床炉は、位置的には第72号住居跡に伴う炉跡と見られる。この住居跡群から晩期中葉の大洞C2式の土器が主体的に出土し、晩期中葉ごろに位置付けられる。他に目立つ遺物は出土していない。

**第67号・第73号住居跡** 第61号住居跡群と、第63号住居跡群に挟まれた位置にある、やや東に偏って巡る二重の溝を住居跡の周溝と判断した。周溝

以外には、炉跡などの施設はなく、住居以外の施設の可能性が残されている。周溝は、外周の第67号が約8mを超えるものと思われ、内周の第73号が約5mである。その規模は、この周辺の住居跡とはほぼ同様である。なお、この住居跡群を確認した面（地山面）が傾斜しており、第67号の周溝は北側で確認できず、第73号の周溝は北側で浅くなっていた。



第63号住居跡群

#### 縄文時代の建物跡

第3次調査で、根固め石や版築土を伴う掘立柱建物の柱穴跡は60基近くある。特に、Ⅵ～ⅧE・Fで40基近く、ⅨDで10基以上が集中的に分布している。この中で掘立柱建物跡として現場で推定できたのは、ⅥEで第2号の1棟、ⅧEで第3号の1棟の、2棟分に過ぎない。

第2号建物跡は、棟持ち柱が付く掘立柱建物跡で、根固め石を伴う柱穴だけから構成される。規模は、梁間1間（約3.5m）、桁行2間（約3.3mの等間隔）である。妻側から棟持ち柱までの張り出しは約1mである。第3号建物跡は、第61号住居跡群に一部が重なった、梁間1間、桁行2間の棟持ち柱が付かない掘立柱建物跡である。なお、第2号・第3号ともに、柱穴出土の土器から、時期を推定することは困難である。



第63号住居跡群出土の石刃

#### トチの実ピット

第2次調査では、第51号住居跡の床面から出土したトチの実が注目を集めた。第3次調査では、炭化したトチの実を出土したピットが9基ある。ⅥEで1基、ⅥFで2基、ⅦF-6~9 b~dに6基のトチの実ピットが集中している。ここではトチの実を多量に出土したピットを、便宜上「トチの実ピット」と呼称する。

ⅦFのトチの実ピットは、東西の5mの線上にほぼ一直線に5基が並び、一直線に並ぶ中央のピットの南、約2mのところにもう1基が位置している。ⅦFのトチの実ピット出土のトチの実は、ピット覆土の上面（遺構確認面）に散布している例と、上面からピット中程まで落ち込んでいる例がある。ⅦFのトチの実ピットの規模は、直径約40~80cm、深さが約35~50cmで、周囲にも同規模のピットが並んでいる。トチの実ピット出土の土器は、P2・3・4・8・9が後期初頭の三十桶場式土器を、P10は後期中葉の三仏生式土器が主体的である。このⅦFのトチの実ピットの周辺にある同規模の



第67号住居跡群



第2号建物



ⅦF-P17の根固め石



トチの実ピット (VI E-P61)



トチの実ピット (VI F-P64)



トチの実ピット (VI F-P2)



ベンガラ? の状況

ピットは、トチの実ピット同様、焼けた炭化物が混じっている例が複数ある。如跡は確認されていないが、ピットの配列などから住居の柱穴のようなものが想定される。ⅧFのトチの実ピットの性格については、火災に遭って焼け残りのトチの実が柱穴などに落ち込んだ可能性も含めて検討したい。

ⅥE・Fのトチの実ピットの規模は、深さはいずれも60cm内外と同じであるが、直径に開きが見られる。ⅥE-P61とⅧF-P89の2基は直径75cm、ⅧF-P46は110cmと大きい。後期中葉の三弘生式土器が出土したⅥE-P61は、確認面から底部までトチの実が詰まっている。その点数は、数百に及ぶ。中期後葉の大木9式が出土したⅧF-P46は、ピットの壁際から底部までトチの実が多量に確認された。大木8b式土器が出土したⅧF-P89のトチの実は、ピットの上面から中程までに50~100個近くがあった。ⅥE・Fのトチの実ピットは、ⅧFのトチの実ピットと比べてピットの規模に違いがあり、かつトチの実の出土量も多い。

縄文中期では、地面の中を袋笠しくはフラスコ状に広がっているピットから、ドングリなどの堅果類が出土する例があり、貯蔵用の穴と考えられている。中道では60基以上のフラスコ状ピットが存在しているが、堅果類などの植物遺体の出土は1基も確認されていない。トチの実の保存方法については、第51号住居跡例から、住居内の棚の上で籠に入れて貯蔵する状況が新たに推測された。その他に、第3次調査で検出されたⅥE・Fのトチの実ピットから、同規模のピットも貯蔵用の穴の可能性もあることを指摘しておきたい。

なお、直接的に遺構・遺物ではないが、ⅧE-3~5 d・eにおいて、直径ほぼ30~50cmの範囲で、赤色に変色した地山面が数カ所認められた。現場で検討したところ、土器に塗るベンガラが散布していた可能性が高い。詳細については、今後を検討したい。

#### 主な出土品

第3次調査で出土した縄文時代の遺物は、縄文中期・後期・晩期の土器と、石鎌・石槍・打製石斧・石錘・土鎌・石鎌・石皿・凹石などの道具類、首飾りの玉類、土製耳飾りなどの装飾品、土偶・石棒・石剣・石冠などの呪術的な遺物がある。第3次調査は、晩期の住居跡が10軒集中して検出されたこともあり、石冠・石棒・石剣などの呪術的な遺物が多い

傾向にある。また、石鏃が未製品も含めて280点以上出土し、新潟県内の縄文晩期に石鏃が多い傾向と同じである。

第3次調査の遺物の中では、骨角器の弓筈と、鐔形土製品の出土が注目される。弓筈は、獣骨の関節部分を加工したもので、VI E-P142から出土した。弓筈は、弓の弦を張る溝が彫られ、弓の先端を差し込む口の一部分が破損していた。また、骨の関節部分で、弦を張る溝と弓の先端の差し込み口の間には目が2個一対に穿ってあった。弓筈が出土したピットは、50×70cm、深さ67cmの楕円形で、中期中葉の大木8b式土器が出土している。弓筈などの骨角器は、貝塚や低湿地などで多く出土するが、貝塚でも、低湿地でも無い中道で出土したことは、骨角器を残存させる条件が整っていたことを示すものである。なお、弓筈の出土は、少なくとも長岡市内において初めての事例で、新潟県でも初例かと思われる。

鐔形土製品は、中央に楕円形の穴があり、周囲が円弧状にえぐられたようになっているもので、全面に朱が塗られ、入組風の文様が施されている。出土位置は、中期の土器が主体的に出土したVI F-9fであるが、文様は縄文後期末から晩期にかけて見られる入組文であるところから、後期末から晩期初めごろの所産と考えられる。なお、鐔形土製品の類似品を、各地に照会したところ、岐阜県で「ホト石」という名称の石製品がある程度で、類似品は見当たらない。このために名称の検討をした結果、形状が刀の鐔に似ていることから「鐔形土製品」とした。

動物の皮を剥いだり、皮をなめすときに使用すると考えられている石匙は、つまみが1個の場合がほとんどである。IX E-1b出土の石匙は、つまみが2個ある横形の石匙で、つまみには接着用のアスファルトが見られる。アスファルトはつまみの片面づつ交互に付着しており、2個のつまみにそれぞれ別の柄が装着していたものと考えられるなど、石匙を柄に装着する方法が推定できる貴重な資料である。

第2次調査で出土した「多孔底付注口土器」が第3次調査でもⅣ F-6dの包含層で倒立した状態で出土した。多孔底付注口土器の出土例は、管見ではこれで3例目とごく僅かである。新潟県内では中道の2例だけである。第2次調査出土例は、多孔底部の多くが欠損していたが、第3次の出土例は注口の上部と、注口の直上にあたる多孔底の一部が欠損しただけである。残存部から注口と多孔底部とが橋状に結ばれていた可能性がある。



VI E-P142出土の弓筈



VI F-9f 出土の鐔形土製品



IX E-1b 出土の石匙



多孔底付注口土器の出土状況



大洞C1式土器と匂玉・石鏃

## 中世の中道

第3次調査で発掘された遺構・遺物は、ⅦEの包含層（黒色土）中の骨と渡来銭、ⅩD出土の人形木製品等である。ⅦEには、幅約4m、延長約10mの範囲に骨と渡来銭が伴出した箇所と、骨だけを出土した箇所がそれぞれ4カ所ずつあった。黒色土中に骨と渡来銭が位置していたため、墓穴などの土壌は確認することはできなかったが、一塊の骨と5枚の渡来銭が伴出した41GP例から、人骨と副葬の六道銭を埋葬した墓穴と判断した。このエリアには骨以外に、渡来銭だけが出土した箇所が5カ所ある。渡来銭の出土数は、6～7枚出土が4カ所、1枚だけが1カ所である。1枚であってもこのエリアから出土している点から、墓に副葬した六道銭の一部で、出土地点は墓と思われる。これにより、ⅦEの墓地には、13カ所に墓穴が存在していたと考えられる。

墓穴に六道銭として埋納されていた銭のうち、最古銭は、621年初鋳の開元通寶、最新銭が1408年初鋳の永樂通寶で、埋納銭の年代観から、15世紀第1四半期から、新しくても15世紀第2四半期までに葬られた墓地と考えられる。

第1次・第2次調査では、地下倉説よりも墓としての機能が強調されている地下式横穴が、ⅦEの墓地から100mほど西に離れた位置で、12基がほぼ環状に巡るように検出された。時期は15世紀代である。また、栖吉川沿岸には、15世紀代の三貫梨墳墓（胸形敏朗・他「三貫梨遺跡－第1次発掘調査－」長岡市教育委員会 1986年）と、松葉遺跡（小熊博史・他「松葉遺跡－中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う発掘調査」長岡市教育委員会 1994年）の2遺跡に墓地がある。三貫梨墳墓は、土壌に土葬した例が多く、火葬骨を六道銭とともに埋葬した松葉やⅦEの墓地とは形態が異なる。このように栖吉川沿岸地域には、ほぼ同じ時期に4カ所に墓地が営まれており、これらの遺構を総合的に捉えて、栖吉川流域における墓制についての検討を加える時期に来ているといえよう。

なお、第3次調査では人形木製品以外に注目する遺物がなく、かつ出土量も第1次・第2次調査に比べて極めて少ない。これは、ⅦEの墓地の外に目につく中世の遺構が存在しないことに起因すると思われる。人形木製品は、右足を腰から欠損しただけの、全長約6cmの木製品である。人形木製品は、素材である丸太の背に近い部分を加工したもので、呪術的な遺物と考えられる。



ⅦEの墓地—43GPの骨と六道銭



45GPの骨



47GPの骨と六道銭

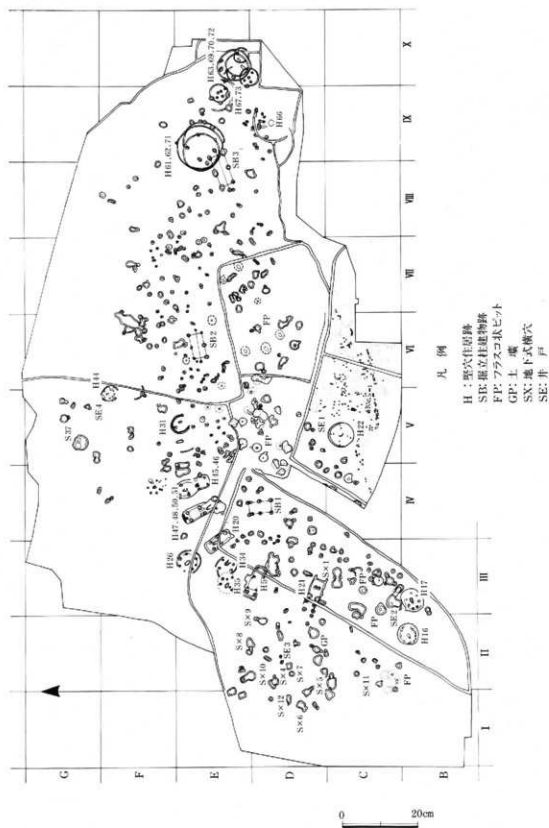


54GPの六道銭

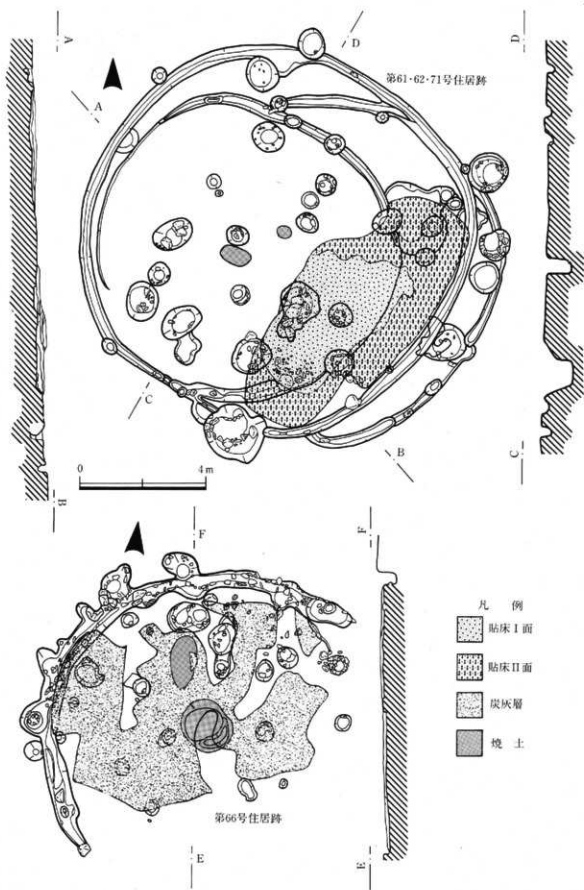


人形木製品





第1図 第1次～第3次発掘調査の遺構全体図(1/1000)



第2図 縄文時代晩期の竪穴住居跡実測図 (1/120)



第3図 第3次発掘調査出土品  
特に指示していない出土品は、包含層出土

# 報告書抄録

ふりがな	なかみちいせきいち							
書名	中道遺跡							
副書名	第3次発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒形敏朗							
調査機関	長岡市教育委員会							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	新潟県長岡市幸町2丁目1番1号							
発行年月日	西暦1997年3月28日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中道遺跡	新潟県長岡市 榎吉町字中道	15202	5	37° 25' 10"	138° 53' 32"	19960507 ～ 1031	6,000	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中道遺跡	集落跡	縄文時代  中世	竪穴住居跡 19 掘立柱建物跡 2 フラスコ状ピット 9  墓穴 13	縄文土器コンテナ 336箱 土偶 18 玉類 8 石鏃 296 石匙 16 石錘 53 石皿 86 石冠 2 磨製石斧 257 打製石斧 119 弓筈 1 渡来銭 72 陶磁器 60				